

聖書箇所：ルカの福音書 10 章 17～24 節

説教題：幼子たちに現す神

1 悪霊が服従した

(1) 派遣される時、悪霊のことは何も触れていない

10 章の最初に、イエスは七十人の者たちを定め、これから向かおうとされる町や村にあらかじめ派遣していたことが書かれています。今日の箇所は、その七十人が帰ってきた場面から始まります。彼らはイエスに喜びながらこう報告しました。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」

それはいいのですが、少し引かかることがあります。10 章の 1 節から 16 節までどこを読んでも、この七十人に悪霊を追い出す権威が与えられたとは書かれていないことです。それなのに、七十人が帰ってきての一番に報告したことは、悪霊どもでさえ私たちに服従したという事実でした。

(2) 十二人が派遣されたときは、悪霊のことに触れていた

9 章 1 節までふり返ってみると、悪霊を追い出す力と権威を最初に授けられたのは十二人の使徒と呼ばれる人たちです。「彼らに、すべての悪霊を追い出し、病気を直すための力と権威とお授けになった。」興味深いことですが、七十人の場合とは違って十二人の使徒が派遣される時は、きちんと最初から悪霊のことが確認されていたのです。

イエスは七十人が語る報告を聞き、こう語ります。19 節。「確かに、わたしは、あなた

がたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加える者は何一つありません。」

イエスは最初から七十人を派遣するにあたり、あらかじめ悪霊を服従させる権威を授けていたのだと、ここで初めて種明かしをされます。七十人は、そんなことを知らされないままに遣わされていたこととなります。まさかそんな力を自分たちが与えられているとは思っていません。ですから、彼らが旅先で悪霊に出会ったとき大変戸惑ったと思うのです。目の前に悪霊が立ちはだかり、人々を苦しめていました。なんとかしなければ。やぶれかぶれで十二使徒たちがやっていたことを見よう見まねでやってみました。そうしたら、驚いたことに悪霊は大声を上げて出て行った。こうして七十人は、自分たちにも悪霊を追い出す権威と力が与えられていることに気がついていきます。彼らが帰ってきたとき、喜びにあふれていたのには、そんな事情がありました。

考えてみると、なぜイエスが最初に悪霊を追い出す権威を与えていることを教えなかったのか不思議です。そのことはまた後で触れることにします。

2 何を喜ぶのか

(1) 天に名が書きしるされていることを

喜びに沸き返っている弟子たちをご覧になり、イエスはこんなふうに釘を刺します。

20 節。「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んでではありません。ただあなた方の名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」

弟子たちには、悪霊が服従することがこの上ない喜びに感じられました。でも、イエスにとってはそうではありません。あなた方の名が天に書きしるされていることを喜ぶべきことなのだ軌道修正をします。

天国には、閻魔帳のようなものがあるのだろうか、思ったかも知れません。もちろん、そのようなものがあるわけではありません。「天に書きしるされている」とありますが、これは私たちにわかりやすいようにこう言われているだけです。言い直すと、「神が私たちの名を永遠に記憶して下さっている。」おそらくそれが事実に近いと思います。

(2) 滅びる：記憶を地から消す

神が私たちの名を永遠に記憶して下さることが、どうしてそんなに喜ばしいことなのでしょう。もし記憶されていなかったならどうなるのか。逆の方向から考えてみます。ヒントが詩篇 34 篇 16 節にあります。「主の御顔は悪をなす者からそむけられ、彼の記憶を地から消される。」

かつて生きて生活していたのに、記憶から抹消されていく。だれもその人がいたということを知る者がいない。神さえも覚えていない。そうしたら、その人は存在していなかったことと同じになります。これが「滅びる」という意味です。大したことではないと思うのでしょうか。このことが私たちの生き方にどう影響するか、考えてみましょう。

多くの方がこんなことを言います。「いのちある間、楽しく暮らせたならそれで十分だ。

死んだら土に帰るだけ。どうせ自分のことなどだれも覚えていない。」

でもいっぽうで、私たちの心の奥深い所にはどんな叫びがあるでしょうか。「なぜ自分は生まれてきたのか。こんなに生きるのがつらいのに、どうして苦しみに耐えなければならぬのか。もしも生きることに何も意味がないのなら早く死んだ方がましだ。」

普段は、「死んだら土に帰るだけ」と口で言っています。でもこの考え方を突き詰めれば、がんばって毎日生きていることにまったく意味がないことになってしまうのです。つらい思いをしながら生きていくことに、何の意味もないことになる。多くの方がうすうすその事に気がついているのだらうと思います。多くの方が、生きるのが苦しい、つらいと言うのは当然です。

そんな私たちをご覧になり、神は私たちを救おうとされました。救いとは何か。きょうのイエスのみことばに即して言い換えれば、「私たちの名前が天に書きしるされる」ということになります。ただ名前を覚えていますという意味ではありません。名前とは、私たちのいのちそのものを指します。神によって永遠に私たちの名前が覚えられる。言い換えれば、私たちのいのちが永遠に神とともにあるのだと言っています。

もしそうなったらどうなるか。今たとえ生きるのがつらくても、悲しいことに会ったとしても、あなたのいのちの価値は何一つそこなわれない。何があっても、あなたのいのちのすばらしさは変わらない。神はそのように語ってくださるのです。

3 幼子に現す神

(1) イエスは権威を授けた

続く21節で、イエスは聖霊によって喜びにあふれ、父なる神に語ります。ポイントはこうです。「これらのことを、賢い者や智恵のある者には隠して、幼子たちに現して下さいました。」「これらのこと」とは、七十人がみずから語ったことばを指すと考えられます。「あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」

19節には、弟子たちに悪霊を服従させる権威を与えたのはイエスであったと書かれています。そこだけ読めば、これらのことを幼子たちに現したのは、イエスなのかとおもいますが、どうもそうではない。

(2) 父なる神が現して下さった

イエスからすばらしい権威が与えられていることを、弟子たちに気がつかせて下さった。それは父なる神のみわざであった。そういう順番になっています。

どうしてこんなに回りくどい言い方をされるのでしょうか。イエスが権威を与え、弟子たちがそのことに「自然に」気がついた。それでいいではないか。その方が単純でわかりやすいではないか。

このことを私たちの状態に照らし合わせてみると納得できるはずです。私たちは、イエスからすでに救いというすばらしい恵みを与えられています。その恵みのすばらしさに気がついていきます。けれども、気がついていないもたくさんあります。与えて下さったのだから、「自然に」わかるはず、ではないのです。なぜ気がつかないのか。父なる神が止めておられるから。では、なぜ止めるのか。

(3) 幼子に

イエスがこう語っていることに注意して下さい。「これらのことを、賢い者や智恵ある者には隠して、幼子たちに現して下さいました。そうです。父よ。これがみこころがなつたことでした。」

私たちは子どもの時から、もっと勉強して賢くなれといわれ続けて来ました。智恵のない者は負けるだけ。勝ち残るためには智恵のある者でなければならない。そのために必死の努力をしてきました。

ところが聖書は逆さまなことを言います。賢い者ではなく、智恵ある者でもなく、幼子たちにだけ、神のみこころが明らかにされていく。

私たちの教会ではこの一年、週報の表紙に第一コリント1章27節のみことばを掲げております。「しかし神は、智恵ある者をおぼかすために、この世の愚かな者を選び、強い者をおぼかすために、この世の弱い者を選ばれたのです。」

読みようによっては厳しいみことばです。「私は賢い」とか「私は強い」と思っているうちは、神のみこころを知ることは難しいということになります。すでにイエスからすばらしい恵みを与えられているのに、気がつかない。わからない。その理由がこれなのです。

聖書は私たちに、何度も繰り返し語ります。あなたは、弱くても良い。愚かであっても良い。むしろ神はそのような者を選んで下さる。私たちはこの世の常識から見れば、愚かかもしれません。何も持たないで旅に出かけた弟子たちのような者かもしれません。笑われるでしょう。指をさされながらさげすまれるでしょう。でも、何も落ち込む必要はない。神は、未熟であわれと見えるような者にこそ、ご自分の御真実を豊かに現して下さい。そん

な方が私たちの神だと言われます。

幼子であろうとすることの難しさを感じます。まだまだ古い生き方が抜けません。でも、十字架で幼子となられたイエスに目を留めながら歩んでいきたいと思います。